

N子とY子の育ちあいについて

山田陽子

(中部学院大学短期大学部)

はじめに

N子とY子は養護学校の小学部で入学から卒業までの6年間同じクラスで学校生活を送った。女兒はこのふたりだけだった。私は6年間彼女達を担任した。ふたりはかわりのなかで、互いに影響を及ぼしあいながら、それぞれの成長を豊かなものにしていった。

津守は人間が育つことを「存在感・能動性・相互性・自我」の4つの側面からとらえている。そして相互性に関して「あらゆる面の成長の基盤である他人との相互性の中で自我を強められる経験をする」と位置づけている。自分が変わるのはあくまで本人の力であって、保育者や回りの子ども達が変わるのではない。それでいて本人だけの力で変わっていくには限界がある。相手が新しい自分になると、もう片方もかわる中で新しい自分になっていく。

本研究ではふたりのやりとりの実際を述べて、そこから生まれるそれぞれの成長について考察する。

<それぞれが自分の世界を広げる>

Y子は小学部から入学し、初めての集団生活を体験することになった。当初は母親におぶわれたり抱かれたりしてクラスルームの隣のホールで過ごした。手には必ず、兄の参考書とか姉の財布など彼らが大事にしているものを持っていた。家族という心の基地を学校に持ち込んで自分の足場にしようとしている気持ちが素直に表現されていた。Y子は他の子どもが保育者に抱かれたり負ぶわれている姿を見かけると引き寄せられるようにして母親から離れて傍に行き、その子どもが保育者から離れてひとりでも動き出すと母親のところへ戻るのだった。

N子は幼稚部から在籍していた。この時期のN子は幼稚部の頃からの親しい保育者に抱かれて階段の上り下りをくり返すことを日課にしていた。自分にとって重要な他者が自分の期待に応えてくれることと静かな空間で安心して過ごす時間を作ることを願っているようにみえた。Y子はN子の階段の上り下りが始まると、必ずN子の洋服を握って同行していた。傍にいた保育者が抱っこしようと働きかけても応じなかった。Y子は保育者と触れ合って一体化することで、自分の存在を相手に吸収されてしまうような恐れを感じているようだった。その頃Y子は足が弱く、駅のホームの階

段はいつも母親が負ぶっていた。Y子の足は校内の階段の上り下りで自ずと鍛えられていった。そして自分の足で歩くことが母親から離れて過ごすことを日常的にしていた。その一方で、保育者を心のよりどころにしているN子と自分を同一視する形で、母親以外の大人との信頼関係を体験し、自分の世界を広げていこうとしているようにみえた。N子は、Y子の登場でこれまでの状況が壊されることになったが、Y子を拒まなかった。N子が保育者への信頼を支えにしてY子に象徴される、自分を脅かすかもしれない周りの子ども達をも受けとめられるような、存在感の強さを持ち始めている時期だったからこそ、成立したやりとりだったと思える。

<それぞれの好きなことを自分で広げる>

Y子はN子がハモニカを吹くとすっともらって吹き始める。N子がトランポリンに乗れば自分も乗る。N子がやることは初めてのことで迷わず自分も同じようにやりたがる。昼食の際、Y子はN子のお弁当から自分の好きなおかずをすっともらって食べようとする。私が待ったをかけると、N子はY子のお弁当におかずを入れてあげる。Y子は自分のおかずもN子にあげようとする。N子は泣いてことわる。N子は自分のものをあげるのはいいが、相手から受け取るのには抵抗があった。保育者はそのことを気遣っていたが、Y子はありのままにN子に働きかけていた。そんなある日、N子は「Nちゃんもやってみる」と言って、自分がやるということを表明した上で、魅力的だと思える他の子どもの遊びをまねるようになった。中にはN子がこれまで避けてきたあそびも含まれていた。N子のまねる行為は受け取ることであり、挑戦することだった。

<自分の思いを相手に表明するやり方を学びあう>

ふたりは自分の思いを相手に表明するときのやり方が異なる。たとえば私がある時期から、さまざまな事情で朝ゆつくり登校したり、久しぶりに登校した子どもに「まっていたわよ。」と声をかけるようになった。するとN子は「まっていた」(先生、私のことも待っててくれたよね?)と、Y子は「いたあ」(いたあ。先生が私のこと待っててくれた!)と挨拶するようになった。二人の人格がその言葉に表れていた。ピアノで弾いてほしい曲を要求する時、N子は「今度は何がいい?」

と私に声をかける。私が改めて「今度は何がいい？」と尋ねると、好きな曲を言う。Y子は「おうた」と言って要求し、私が自分の思いと違う曲を弾くと再度「おうた」と言って、率直に自分の思いを伝えてくる。N子は時折、Y子のように「いたあ」「おうた」と言うことがあった。その時は意を決してという感じがした。

Y子は、N子が「ちょっとさみしいの」とか「ポテトチップスたべたいなあ」とか、絵本を見ながら「新幹線乗りたいなあ」と自分の思いをやわらかな語り口で伝えるようになった頃、私に「おかあさん」と呼びかけて、「ななななな、ななななな」とN子のイントネーションをまねて、会話の後に余韻を残すような語りかけをしてくるようになった。ふたりがそれぞれ相手に憧れを持っていて、自分の中に取り入れようとしていることが伝わった。

＜お互いに一緒にいるのが楽しいことに気づくことで自分を調整しようとする＞

N子とY子、そしてA夫（3年）は毎日のようにホールにあるピアノで自分達の好きな歌を弾いてほしいと要求してくる。おもしろいのはこのうちの誰かの要求に応じていると他のふたりが必ずといっていいほど、音を聞きつけてやってくることである。3人が集うのにぎやかで、楽しさが倍になっているように感じる。積極的に楽しみたいと思ったのか、はじめ歌なら何でも好きよという感じだったY子が自分の弾いてほしい曲を主張するようになった。反対に、以前は私が他の子どもの要求に応じて、結果的にN子やA夫の好きな歌ではない歌を弾くと、泣き出していたN子と怒って私の手を振り払っていたA夫は、他の人の好きな歌も折り合いをつけながら一緒に楽しむようになった。ふたりが4年生になった頃、Y子に「おうた」と要求される時に「Yちゃん、弾いてほしい曲を歌ってみて」というと、にこっとして「先生、私が何を弾いてほしいか自分で考えてよ」と伝えてきたり、「なななな…」と好きな歌のメロディーを歌って伝えてくるようになる。私が応えられない状況の時には事情を話して「Yちゃん自分で弾いて」と言うと、弾いて待っていることもあった。N子（4年）は遊びに行った保育室で子ども達が歌のテープを聴いていて、その曲がいやな時の対処の仕方として、「止めてもらう」「他の曲にかえてもらう」のほかに「場所を移動する」「O.Oちゃんの好きな歌だということに納得して聞き続ける」「好きな遊びをしながら次の曲を待つ」という選択肢を増やしていった。

＜目の前にいなくても相手の存在を感じる＞

Y子は家から持ってくるものの中にN子の写真が加わった。それは愛育通信（学期の終わりに子どもと保護者に向けて作成し、配布するもので、その子の生活の様子を撮ったスナップ写真と成長の記録から成る）を切り取ってきたものだった。握りしめるのでくしゃくしゃになっていたが、それでも手放さずに1週間ほど持ち歩いていた。私は友達を意識するのに写真が有効であることに気づかされた。それで、スナップ写真をソファの後ろの壁に貼って、他の子ども達も見er機会を作り、Y子が自由につけたり外したりできるように台紙をつけておいた。Y子は朝、その日持ち歩く写真を選ぶのが日課になった。愛育通信が戻ってくるときに、いかにY子が愛読しているかが手に取るように伝わってきた。N子も同じだった。N子が手術のために入院して、そのお見舞いに行ったときのこと、後から入ってきた父親が「Nちゃん、君の宝物をもって来たよ」といって愛育通信を手渡した。N子は喜んですぐに開き、私を誘って一緒に見た。横になるときも、枕元に置いていた。

＜相手のために何かしてあげたいと思う＞

N子もY子も発作の薬を服用している。N子は体に変調を来したとき、「ちょっと変」と言って、回りの大人に伝えて、しばらく休む。Y子が発作を起こしたとき、N子は「Yちゃん、ちょっと変」と言って、そばで保育者と一緒に見守っていた。自分がちょっと変だと感じるときと、今のY子が同じだという共感のもとに発せられていることが伝わってきた。Y子はN子がホールで泣いたとき、切なそうな表情でN子を見ていたが、ひとりでクラスルームへ入って行った。少しして涙を拭くものをみつけてきた。それはたまたま雑巾だった。洗濯したてだったので、N子の涙と、そんなY子の優しさがうれしくて出てしまった私の涙も一緒に拭いた。

＜相手の顔を見ると元気になる＞

4年生の3学期頃から、Y子もN子もひとりでクラスルームから出かけていって、様々な保育者とかかわりを持つようになり、その保育者がかかわっている他の子どもたちとも関わって過ごすようになっていった。それでもY子はN子を見るとうれしそうで、より元気な表情になった。N子もY子の姿を見ると安心するようになった。

引用文献：

- 1) 津守真 新・保育講座「障害児保育」（共著）ミネルヴァ書房
- 2) 津守真 保育の一日とその周辺 フレーベル館